私の青春時代

中村久枝（飯山満町・64歳）

昭和二十年三月九日、東京大空襲の夜。両親、弟妹達は地方に疎開をしていましたので、私は大塚の伯母の家に居候をしていました。その晩、窓から道路をはさんで向いのフトン屋さんの屋根を何気なく見ていますと、丸く赤みがかった黄色いものが、長く尾を引いてフワフワ浮くという感じ乍ら、早いスピードで飛び去っていくのが目に入りました。あれが人魂というものかも知れない、と思った瞬間、二階からものすごい音と共に焼夷弾が落ちてきました。「東部軍管区情報……」の放送と同時にモンペ姿になっていましたので、慌ててコートを羽織い、いざというときの為に用意してあるリュックのことは、とんと忘れて、玄関に置いてある雨傘を五、六本抱えて表へ飛出しました。すでに後方は火の海でしたので、B29の進む方向へ逃げまどう人々と一緒に走り、落下して破裂する度に傘をパッと開いて火の粉を防ぎ、気がつくと手には一本も持っていませんでした。あまりの熱さにコートを防火用水につけて濡らし、頭から被り、表戸の開いていた薬局に飛び込みました。ほっと一息ついて通りを見ますと、二十才位の女性が着ているきものを脱いで歯で喰いちぎっては細く裂き、「アメリカ兵が上陸してきたら、この紐で首をしめて私を助けて下さい……」と叫んでいるのです。あまりの興奮に発狂してしまったのでしょう。逃げる人々は誰一人相手になる余裕もなく、右往左往するばかりです。見かねて私が女性に近づこうと店から出ると同時に、一大音響と共に薬局が木端微塵に吹き飛んでしまったのです。棚に並べてあった薬品に引火して、あんなに火を吹いたのかも知れません。私はその狂ってしまった女性を助けるつもりで屋外へ出たお蔭で、反対に助けてもらったのです。その人の手を引いて駆け出しましたが、どこ迄逃げても火の海で、真冬だというのに私まで着ているものを脱ぎたくなる程の熱さです。この焦熱地獄から逃れるには大塚駅の土手をはい上がるしか道はありません。しかし、その土手も枯れ草が燃え広がっていて登ることもできません。コートを水がポタポタたれる程濡らしてきて、火のついた枯草をたたき消しながら必死によじのぼり、やっとはい上がって驚いたことには、線路の上も枕木が燃え上り、明か明かと人々の顔を照らし出していました。五十人、百人いえ何百人かもしれない数多くの人が「南無妙法蓮華経」「南無阿彌陀仏」とお題目を唱えていました。「皆さん私達は同じ日本人です。日本人は日本人同志、仲よくここでかたまって死にましょう。」と叫んでいる人もいました。土手の上から見渡す限り火の海で、日本中が灰になってしまうのかと思う程の凄まじさでした。この光景は二度と見ることはできないだろう、という思いが脳裡をかすめました。「まだ十代なのに、今ここで死にたくない。もう一度母や妹達に逢いたい。どうか神さま助けて下さい。」と日頃不信

心の私も皆と一緒になってお経を唱えていました。そのとき紅蓮の炎で真赤な街の上空に、黒い砂挨りのようなものが舞い上りました。どこからか龍巻だぞーという声が暗闇にひびきました。黒い煙りのようなものは段々とこちらへ近ずいて来ます。急いで線路に身を伏せました。ガチャーンという大きな音と共にブリキのバケツが目の前に落ちてきました。まったく降って沸いたようだとは、このことです。勿論拾いました。（このバケツは後々もとても役に立ちました。）今死ぬかも知れない。でも私がお題目を唱へた瞬間足許に授かったバケツ。何故か死なないで助かるような気がしました。いえ、助かりたいと思う気持がいっそう強くなったのかもしれません。ホームを見ました。とてもとても長いホームに感じられました。火の手は盛んに燃えて、今にも屋根が崩れ落ちてきそうでした。しかし、そこを通り抜けなければ助かる方法はありません。こんな冷い線路の上で枕木に焼かれて死にたくない、と思い乍らも、一気に駆け抜けて無事に向う側へ行ける自信もまったくありませんでした。しかし、私一人ではないのです。横で相変らず、助けて下さいと声を枯らして哀願している女性は、とうとう赤い長襦袢まで切り裂きはじめました。可愛想なこのひとをなんとしても、助けてあげたいと思う気持が決心をさせました。バケツを頭にかぶると、狂ったひとの手を摑んで一気に駆け出しました。ホームの向う側に着くのと燃えつきたプラットホームの屋根が崩れ落ちるのとは同時位でした。幸い私の思った通り、出た側は大分下火になっていました。そのとき暗闇から思いがけず、列車が近ずいてくるではありませんか。そしてホームに止りました。扉が閉っていましたので、私は屋根によじのぼりました。兵隊が近ずいて来ました。「バカヤロー早く降りろ」「お願いです。私達二人を乗せてって下さい。屋根でもどこでもいいんです。」「バカモン、この軍用列車は馬を乗せてんだぞ。人間と軍馬とどっちが大事だと思ってんだ。早く降りるんだ…」と足を引っぱられて引きずり下ろされてしまいました。そのとき一枚の扉が開いて馬が飛出し、燃える火を見て大暴れしながら、崩れたホームの中へ走り去って行きました。翌朝白い煙りがくすぶりつづける中を、昨夜逃げてきた道を戻ってみました。枕木の上に何百人という黒焦げの死体が、折り重なって山になっていました。私も狂ったこの人もこの中の一人になっていたかも知れないと思うと背すじを冷たいものが走り總毛だつ思いで手を合せました。かろうじて逃げのび生き残った人達も鰯のくさったような真赤な目をしていました。焼けた米倉がありました。黒く焦げたお米をバケツにすくい入れ、二人でボリボリと食べ乍らあてもなく歩きました。街路樹によりかかっている人に、「おばあさん大丈夫ですか？」と手をかけると、ぐにゃっと倒れこんで来ました。まるで弁慶の立往生のように立ったまま焼け死んでいたのです。列車から逃げ出た馬でしょうか。爆風で首は飛び、しっぽは焼けて失くなり、どっちが前か後か分らない姿で横倒しになっています。一皮剝けてセルロイドの人形のような手で空を摑むようにして死んでいる幼い子供、性別も分らない程黒焦げの人が、歩く先々の道の真中に転がっています。私はその佛さまを踏まないように通りました。又、少し歩くと丸太を横に並べた上に、まるで魚のように死んだ人が積まれて燃やされていました。後からあとからトラックで運ばれてきて、まだ灰にならない人の上に放り出されて焼かれています。辺り一面に嫌な臭いがただよい、歩いても歩いても臭気は後を追って来ます。向うからリヤカーを引いた老夫婦が来ました。寒空を裸で歩いている狂女に、古いすり切れた着物をかけてくれました。するとニタニタ笑っていたそのひとは、そのままリヤカーに摑まって、ついて行って

しまいました。狂っていても人の情が分ったのでしょうか。呼び止めてみても、十代の私がこの先どうしてやることもできません。段々遠去かる後姿に小声で「さようなら、元気で暮すのよ。戦争が終ったら貴女もきっと治ってね。」とつぶやき、泪がほほを伝わって流れ落ちました。

あれから四十数年、あの人もこの人もどう変ったのでしょう。私もすっかり変りました。でも今だに泪は枯れることもなく、あの恐ろしかった空襲の夜を想い出すと、胸が痛み二度と戦争があってはならない。いつまでも、今のこの平和が続くことをいのらずにはいられません。

終戦間際にはいろんなデマが流れました。年頃の女性が一人で居ると、下田の唐人お吉のようにラシャメンになるんだよ、という巷のうわさに脅へました。

そんな私に二つの縁談がありました。一人は京都の呉服屋の若旦那で、一生着る者に不自由はさせないという条件で、もう一人は貿易会社の御曹子です。お見合してからデートしてゆっくり人柄をみるひまはありません。なにしろ早く人妻になっていなければ、鬼畜米兵のお妾さんになると、まことしやかに流れる噂さを信じていた時代です。早い方が良いというので御曹子の方を選び、一年が夢のように過ぎました。

二十一才で母になる日、十一月末の雪の日で木炭がしめっていて、車が動かず桜上水から下高井戸の産院迄、一駅を一時間かかって行ったという今では嘘のような本当の話の時代です。あの終戦の混乱期、テレビも育児の本も無く無知な二十一才の私は、母が妹達を育てた昔を思い出し乍ら、自己流で育てました。その苦労はとても簡単に筆で表すことはできません。一億總乞食といわれた配給時代、お乳の出が悪くて赤ん坊に食い切られて乳腺炎になったり、庭に作った大根がゴボウ位の太さの東京育ちの情なさも今では笑い話になりました。その娘も結婚して幸せに暮しています。

長かった私の戦中戦後も終りに近ずこうとしています。来年の春には老人会に入れる年になります。あの火の海の中でもう一度逢いたいと想い描いた母も、今は彼岸の人となりました。若くして逝った良人の供養、そしてあの東京大空襲の夜線路で一緒に拝み乍ら、心を残して亡くなった方達のご冥福を祈って、与えられた天命を喜怒哀楽が世の常なら、怒哀を取り去り喜楽にのん気に過ごして参りたいと思う日々でございます。

逢うこともできぬ浄土や虫時雨

老一人話し相手は盆の月

私にも文才があったらもっと戦争の悲惨さ、恐さを伝えられますのにと、残念に思い乍ら書きました。平和であるということは、今の若い世代の方々ばかりでなく、混乱期を体験した私達老人にとりましても本当に幸せでございます。このような日々をすごせる時代が来るとは夢にも思わずに戦地や被災で亡くなった方々のご冥福を心からお祈りして終りと致します。